

## ディケンズの機械のイメージ ——『ハード・タイムズ』を中心に

甲斐清高

一般的にヴィクトリア朝文学は、産業化、新しいテクノロジー、そしてそれらがもたらした大型機械といったものに対してネガティブな態度を持っていたという印象がある。20世紀以降の文学批評、特にヴィクトリア朝文学を扱う批評のスタンスは、概ね産業化に対して否定的であり、その結果、反産業主義的といえるべき作品ばかりが評価され、産業化や機械化を称賛するようなテキストは、扱われることさえ稀であるという傾向にあった。最近では、このような反産業主義的、田園主義的傾向に疑問を呈し、産業化に対して好意的であったヴィクトリア朝のテキストに焦点を当てる研究者も見られる<sup>1</sup>。

トマス・カーライル (Thomas Carlyle) やジョン・ラスキン (John Ruskin)、マシュー・アーノルド (Matthew Arnold) といった批評家や、多くのロマン派詩人たちと同様に、チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens) も、産業化に対して批判的な態度を取るヴィクトリア人の列に入れられることが多い。ディケンズが機械嫌いであるという印象は、その小説『ハード・タイムズ』 (*Hard Times*) における産業主義批判、そして、同作品中の架空の工業都市コークタウン (Coketown) の描写に負うところが大きいだろう。作中のコークタウンを描写した部分は、産業主義文学の代表として、様々な文学アンソロジーに抜粋されている。

ディケンズの『ハード・タイムズ』は、フランシス・トロロプ (Frances Trollope) の『マイケル・アームストロング』 (*Michael Armstrong*)、ベン

ジャミン・ディズレーリ (Benjamin Disraeli) の『シビル』 (*Sybil*)、エリザベス・ギヤスケル (Elizabeth Gaskell) の『メアリー・バートン』 (*Mary Barton*) や『北と南』 (*North and South*)、チャールズ・キングズリー (Charles Kingsley) の『オールトン・ロック』 (*Alton Locke*)、シャーロット・ブロンテの『シャーリー』 (*Shirley*) などと並んで「工業小説」 (“industrial novels”) の代表的な作品と見なされる。少なくともディケンズの長編小説の中で、工場、そして工場労働者の姿をこれほど多く描いたものは他にない。

このディケンズ唯一の「工業小説」は、確かに産業化のもたらす様々な弊害を非難している。工場での単純作業がもたらす停滞感や閉塞感、そして統計の重視による個々の人間性の軽視などは、作品が最も激しく攻撃している面だろう。しかし、ここから、産業化や技術発展そのものに対して作者が嫌悪感を持っている、と読み取るのは、短絡にすぎるのではないだろうか。産業主義を視覚的に表わすイメージとして、機械——蒸気機関と、それが動かす工場や鉄道機関車——が頭に浮かぶだろう。本稿では、『ハード・タイムズ』に焦点を当てながら、ディケンズの作品の中で機械がどのように扱われているかを検証し、ディケンズの産業化に対する態度について考察したい。ハーバート・サスマン (Herbert Sussman) は、ディケンズの想像力が工業小説を書いた作家の中で、あるいはヴィクトリア朝作家の中で唯一、機械テクノロジーを十分に吸収し、機械を隠喩の主意 (*tenor*) だけではなく媒体 (*vehicle*) としても使用して、複雑な象徴を作り上げた と述べる (*Victorians and the Machine* 41)。ここでは、隠喩の媒体としての機械の扱われ方、そして、具象物としての機械そのものの描かれ方、その両方に目を向ける。

## 1

F・R・リーヴィス (F. R. Leavis) はイギリス小説の「偉大な伝統」からディケンズを除外しながら、『ハード・タイムズ』だけを「道徳的寓話」 (“moral fable”) として、扱う対象に入れる (258)。確かにこの小説の道徳

的主張は明確であり、「事実」と「空想」という二項対立のもとで、「事実」ばかりを重視して「空想」を否定することが、子供や工場労働者をはじめ、社会全体に悪影響を与えると訴えている。この「事実」と「空想」の二項対立は、カーライルが「時代の徴候」(“Signs of the Times”)の中で持ち出す「機械的なもの」(“the Mechanical”)と「動的なもの」(“the Dynamical”)という対立を想起させる(Carlyle 68-73)。もちろん、この二組の二項対立を同じものと見なすことはできないが、ディケンズの「事実」と、カーライルの「機械」には重なる部分があるように思える。カーライルによる隠喩としての機械は、『ハード・タイムズ』の「事実」と同様に、否定的な意味を持つように解釈される傾向にある<sup>2</sup>。カーライルへの献辞を付した『ハード・タイムズ』が、この否定的な機械の隠喩を受け継いでいると考えても大きく間違っていないだろう。

『ハード・タイムズ』において機械が隠喩の媒体として用いられるとき、ほとんどの場合ネガティブな意味を担っている。比喩としての機械は、その単調さ、非人間性において、作品における二項対立の糾弾される側に置かれている。この作品よりも前に書かれた『ドンビー父子』(*Dombey and Son*)も産業社会を扱った小説であるが、そこではビジネスの世界がもたらす画一性、非人間性が「機械」の比喩で表わされている。自分の善意に従って行動することをずっと控えていたモーフィン(Morfin)は、その後悔の念を次のように話す。

I [...] was quite content to be as little troubled as I might be, out of my own strip of duty, and to let everything about me go on, day by day, unquestioned, like a great machine—that was its habit and mine—and to take it all for granted, and consider it all right. (*Dombey and Son* 806)

隠喩の媒体として用いられる機械が、単調性、画一性、非人間性を表わすことは、19世紀でも現代でも常套的であり、このような機械のイメージ

は明らかにカーライルの「機械的なもの」と「有機的なもの」の対比に通じるものであろう。『ハード・タイムズ』でも、抽象概念として捉えられる機械が、非人間性を表わしている。例えば語り手は、グラッドグラインド (Gradgrind) の住居、ストーン・ロッジ (Stone Lodge) の生活が「機械の部品と同じくらい単調に進む」(“life at Stone Lodge went monotonously round like a piece of machinery” [46-47])と説明している。ハートハウス (Harthouse) は、グラッドグラインドのことを「機械」(“machine”)と呼ぶ(174)。そして、ルイーザ (Louisa) と共にサーカスを覗いているところを父親に見つかった弟のトム (Tom) は、「機械のように」(“like a machine”)連れていかれる(14)。グラッドグラインドによって事実のみを押し付ける教育を施され、その結果として単純に人格が墮落した例であるトム (ルイーザやビツァー (Bitzer) に関しては、教育の影響がもっと複雑な歪みを示す) が機械と結び付けられている事実からも、抽象概念としての機械が、感情や空想の欠如を表わすだけでなく、不道徳性をも表わすと捉えられていることが分かるだろう。

こうした隠喩の媒体としての機械に与えられる否定的な様相は、実際に機械そのものが扱われているときにも見られる。語り手は、「手」(“Hands”)と呼ばれる工場労働者のひとりスティーヴン・ブラックプール (Stephen Blackpool) を工場機械と対比し、「神の作り出したもの」である人間が、「人間の作り出したもの」である機械よりも威厳において優れている、と述べる。

A special contrast, as everyman was in the forest of looms where Stephen worked, to the crashing, smashing, tearing piece of mechanism at which he laboured. [...] Set anywhere, side by side, the works of GOD and the work of man; and the former, even though it be a troop of Hands of very small account, will gain in dignity from the comparison. (56)

ここで工場で働く人間と並べて比較される機械は、単調性や非人間性といった否定的な属性を備えたものとして扱われている。そして、工場労働のもたらす悪影響のひとつとして、機械に接する人間との境界が曖昧になり、人間が機械化していってしまうという現象が示されている。工場での長時間の労働によって、スティーヴンは機械の一部になってしまったかのような感覚に陥る。

Old Stephen was standing in the street, with the odd sensation upon him which the stoppage of the machinery always produced—the sensation of its having worked and stopped in his own head. (52)

このように、工場労働者と接触する機械そのものについては、その非人間性が強調されている。しかし、こうした例で見る機械は、あまりにも漠然としており、視覚的イメージが与えられているとは言い難い。具体的に詳細な描写を得意とするディケンズの基準で考えると、ここで見られる現実の機械は、十分に実体を持っているとは言えない。結局のところ、このような例の機械は、隠喩として使われる機械と変わらず、機械そのものに視線が注がれているわけではないのだ。ディケンズにおける機械のイメージについて考えるには、もっと具体的な機械の描写を試みる必要があるだろう。

## 2

『ハード・タイムズ』の中で最も有名な工場機械の描写は、第5章「基調」(“The Key Note”)におけるコークタウンの町全体を紹介する文章である。

It was a town of red brick, or of brick that would have been red if the smoke and ashes had allowed it; but as matters stood, it was a town of unnatural red and black like the painted face of a savage. It was a town of machinery and tall

chimneys, out of which interminable serpents of smoke trailed themselves for ever and ever, and never got uncoiled. It had a black canal in it, and a river that ran purple with ill-smelling dye, and vast piles of building full of windows where there was a rattling and a trembling all day long, and where the piston of the steam-engine worked monotonously up and down, like the head of an elephant in a state of melancholy madness. (20–21)

ここでも、詳細で写実的な描写が与えられているとは言い難いが、実体がないわけではなく、鮮やかな視覚的イメージが与えられている。キャサリン・ギャラガー (Catherine Gallagher) が指摘するように、空想を擁護するこの小説には全体的に過剰なまでの隠喩が使われており、コークタウンの描写も空想的な隠喩で溢れかえっている (Gallagher 160)。ここで用いられる比喩の媒体は、「野蛮人」や「ヘビ」、そして「ゾウ」と、異国風の賑やかさを備えたものである。特に、「蒸気機関のピストン」の比喩として持ち出されているゾウは、「憂鬱な狂気」とさらに具体性を与えられ、そのためにますます生気を帯びてくる。そもそも、多くの批評家が注目するように、ディケンズの描写においては、無生物が生命を帯びるといった現象が豊富に見られることを考えると、無生物でありながら自らの内に動力を備える機械がディケンズの想像力を刺激し、生命を帯びているように描かれるのは当然かもしれない<sup>3</sup>。

工場機械は、作中で繰り返し「憂鬱な狂気のゾウ」 (“melancholy mad elephant”) に喩えられる。タマラ・キタブジアン (Tamara Ketabgian) は、ゾウの隠喩から、単調さが強調される機械の中にある抑圧された暴力性を読み取る (54–57)。確かに、憂鬱症、狂気、巨獣にはすべて暴力性が潜在し、その複合物たる「憂鬱な狂気のゾウ」に秘められた破壊的エネルギーは恐怖の対象となりうるだろう。しかし、はたして、この描写におけるゾウの隠喩が工場機械を恐ろしいものに行っていると言えるのだろうか。むしろ、巨大な力を持った機械が、空想の力で何か親しみやすいものとなって

いるのではないだろうか。破壊的な力を秘めた巨大な機械が、見世物にされるような動物に変容することによって、ある意味で矮小化され、機械の危険性や単調性に対する攻撃の激しさが和らげられているように思える。つまり、この有名なコークタウンの描写は、もっぱら工業都市を批判的に描いているだけではなく、むしろ、機械に囲まれた生活のなかでも空想による変容が可能であり、それこそが必要とされていることなのだ、という作者の主張を実践したものではないだろうか。

『ハード・タイムズ』はディケンズの編集する雑誌『家庭の言葉』(*Household Words*) に連載されていたが、そもそもこの雑誌の創刊の精神は、まさに、産業化された世界の中で、「空想」を見出すべきだ、というものである。『家庭の言葉』創刊号の「序文」(“A Preliminary Word”)では、当時の「偉大な発明」(“the mightier inventions of this age”)に言及したあと、エンジンを備えた鉄道や蒸気船、つまり技術革新の生み出した機械の力で移動する旅人のイメージを提示する。

The mightier inventions of this age are not, to our thinking, all material, but have a kind of souls in their stupendous bodies which may find expression in Household Words. The traveller whom we accompany on his railroad or his steamboat journey, may gain, we hope, some compensation for incidents which these later generations have outlived, in new associations with the Power that bears him onward; with the habitations and the ways of life of crowds of his fellow creatures among whom he passes like the wind; even with the towering chimneys he may see, spiriting out fire and smoke upon the prospect. The swart giants, Slaves of the Lamp of Knowledge, have their thousand and one tales, no less than the Genii of the East [ . . . ]. (Dickens, “A Preliminary Word” 1)

ここでは、エンジン(“the Power”)や聳え立つ煙突(“the towering chimneys”)

が、巨人やランプなど『千夜一夜物語』に見られるような異国風の空想のイメージと結びつけられている。つまり、機械と空想との橋渡しは、この雑誌の根本的精神の中にあると言えるのだ。この文脈で考えると、「憂鬱な狂気のゾウ」は、たとえ潜在的な破壊力があるにせよ、機械文化の中に空想を見出す、あるいは機械を空想によって変容させる、という雑誌の理想を、語り手自らが実践していると見なすことができる。

実際のところ、フィリップ・コリンズ (Philip Collins) が指摘しているように、他の作家の工業小説と較べてみても、コークタウンの描写は全般的に細部に欠ける (“Dickens and Industrialism” 664-65)。おそらく、それほど知識がないという理由もあり、ディケンズは機械に対する詳細な描写を避けているようだ。コークタウンは少し距離を置いた視点から描かれている。光で照らされた工場が「おとぎの国の宮殿」 (“Fairy palaces”) に喩えられるのも、こうした距離を置いて空想によって変容させられた描写の例と言えるだろう。最初に「宮殿」のイメージが提示される時、語り手は、「あるいは特急列車の旅人はそのように言う」 (“or the travellers by express-train said so”) と限定を加える (52)。キャサリン・ギャラガーは、この限定に関して、工場が「宮殿」に見えるのは、外部者、すなわち現実を知らない傍観者の視点を通してであり、現実に対する無知は、作品が否とするものだと述べている。そして、ギャラガーはこの「宮殿」のイメージを作中の有害な比喩の例と考える (Gallagher 162)。確かに「特急列車の旅人」という限定をわざわざ加えることによって、厳しい現実から目を逸らせた無責任な態度を示唆しようという意図が感じられる。しかし、後に「宮殿」の隠喩が提示される場合は、必ずしも傍観者の無責任な視点は強調されず、ただ、そのイメージが提示されるだけである。基本的に、機械に対する専門的知識を備えているわけでもないディケンズは、「特別列車の旅人」と同様、ある意味で傍観者の視点しか持ちえない。「憂鬱な狂気のゾウ」のような隠喩も、所詮は外部者の視点と言えるだろう。『家庭の言葉』の「序文」の文脈で考えると、「おとぎの国の宮殿」という空想的な比喩は、まさに列



車の乗客が受け取るべき、あるいは作り出すべきものである。つまり、この隠喩は、機械を空想で変容するという方向性の実践に他ならない、と言えるのではないだろうか。

『ハード・タイムズ』の主張が総括されていると考えられるべきエンディングで、作品の道徳的中心とも言えるシシー (Sissy) の未来の姿が以下のように描かれている。

But, happy Sissy's happy children loving her; all children loving her; she, grown learned in childish lore; thinking no innocent and pretty fancy ever to be despised; trying hard to know her humbler fellow-creatures, and to beautify their lives of machinery and reality with those imaginative graces and delights [...]. (222)

ここでは「機械と現実」が一括りにされ、対蹠的に置かれた「空想」が、それらを美化するのである。たとえ、このような解決策が、部外者からの無責任な態度を含んでいるとしても、空想による機械・現実の変容は、作品全体のイデオロギーに合致したものなのだ。

エフレム・シチャー (Efraim Sicher) が指摘するように、サーカスを見るためにルイーザとトムが覗き込む「抜け穴」は示唆的である (Sicher 254)。作中でサーカス団が体现している「空想」とグラッドグラインドが体现している「事実」の間には壁があるが、そこには抜け穴があり、二つの世界は簡単に隔てられない。作者は「空想」を擁護しながらも、「事実」を否定しているわけではない。「事実」と「空想」の対立が作品の中で打ち立てられているとはいえ、その対立自体は、グラッドグラインド派が事実から空想を排除しようという動きの中で作り出したものであり、本来、対立する必要のないものなのだ。その対立そのものこそ、否定されるべきものである。この作品の主眼は、事実の世界、産業化された機械の世界で、空想も必要とされており、両者は決して相容れないものではなく、その融合

を目指すべきだ、と訴えることなのだ。

### 3

しかし、『ハード・タイムズ』に見られる機械の空想的変容は、空想の擁護という作品の主張だけによるものなのだろうか。そもそもディケンズにとって、機械は非人間的で、単調である、あるいは暴力的、破壊的である、というような否定的な意味を持っているのだろうか。ここで、ディケンズの機械に対する態度について『ハード・タイムズ』を中心に少し考えてみたい。

『家庭の言葉』に掲載された記事の中には、工場機械の危険性を指摘し、工場所有者の責任を問うものがある一方で、ハリエット・マーティノー(Harriet Martineau)による工場訪問のレポートのように、工場、あるいは機械を様々な面から称賛するものも多く見られる。この雑誌が工場労働に伴う危険性を訴えるキャンペーンを打ち出したことも一因となり、マーティノーはディケンズと、いわば喧嘩別れをして『家庭の言葉』の執筆を辞めることになるのだが、ディケンズが必ずしもマーティノーの機械礼賛を不快に感じていたとは思えない<sup>4</sup>。『家庭の言葉』には、機械を肯定的に捉える記事、そして否定的に捉える記事、その両方が掲載されており、その事実は、雑誌の編集者たるディケンズが公平な態度を示すと同時に、彼が機械に対して両義的な感情を持っていたことを示唆しているのではないだろうか<sup>5</sup>。

ディケンズ自身の書いた『家庭の言葉』の記事は、特に機械を礼賛するようなものではなく、『ハード・タイムズ』自体も、工場での労働を好意的に描いているとは考えられない。そして、草稿段階においては、工場機械の危険性を最も明白に表わす例として、スティーヴンを献身的に支える女工レイチェル(Rachael)の妹が、幼いときに工場事故で死んだということになっていた。さらに、レイチェルの妹が工場事故で死んだことを鮮明に伝えるレイチェルとスティーヴンのやり取りには、ヘンリー・モーリー

(Henry Morley) による記事「<sup>ミル</sup>工場で粉碎」(“Ground in the Mill”)への参照が脚注に入れられていた。この記事は、工場事故の悲惨さと、その対策を怠る工場主を辛辣に非難するものである。ところが、ディケンズは最終的にこのやり取りと脚注とを共に削除する決断を下した<sup>6</sup>。この削除に関しては、作品の統一性を保つための芸術的意図といったものから、コークタウンの匿名性の保持、資本家への迎合といったものまで、様々な解釈がなされるが、少なくとも間違いなく言えるのは、直接的な工場機械の危険性への言及がこの小説にとって不可欠な要素ではないと、ディケンズ自身が判断した、ということだ。

作品全体のプロットから見ると、プリーティ・ジョーシ (Priti Joshi) が指摘するように、苦しむ労働者のプロットは途中で捨て去られ、最後まで一貫しているのは誤った教育を受けて苦しむ子供たちのプロットである (Joshi 235)。機械と共に働くことによる単調さが精神的にもたらす悪影響を描こうという意図があるとしても、実際のところ、明確な人格を与えられている工場労働者、スティーヴンとレイチェルは道徳的に極めて優れた人物であり、少なくとも、機械は彼らの精神に悪影響を及ぼしていない<sup>7</sup>。他の労働者たちは特に人格を与えられていない。工場労働者と共にいて否定的に描かれるスラクブリッジ (Slackbridge) は、労働者たちを焚き付ける扇動者であり、工場で労働しているわけではなく、また、悪徳工場主バウンダビー (Boulderby) は、決して機械と共に働くことはない。工場労働者の近くにいるこれら二人の悪役を見る限り、むしろ機械と共に働くほうが道徳的に健全だとさえ言えそうだ。『家庭の言葉』におけるマーティノーの工場礼賛は、工場労働が労働者に健全な倫理観を植え付けると訴え続けるが、『ハード・タイムズ』の作中人物は、その見解を裏付けているかのようだ。こうした事実を考え合わせると、『ハード・タイムズ』は産業化に伴う非人間性など様々な側面を非難している一方で、工場機械そのものに対しては、強硬な態度で攻撃しているとは言い難い。ここには、ディケンズの機械に対する両義的な感情が見え隠れしているような気がする。

## 4

ディケンズは、確かに産業化に伴う様々な弊害について反感をいだいていたが、産業化がもたらす技術発展については好意的に受け止めていたと思われる節がある。工場機械と同様、蒸気機関車は当時の産業化がもたらした機械の代表的なものであるが、鉄道に対してディケンズは概ね好意的であり、時には熱狂的に称賛することさえある。この作家には鉄道以前の馬車の時代への志向があると思われることが多いが、それは正しい認識ではない。ジョナサン・グロスマン (Jonathan H. Grossman) の指摘するとおり、ディケンズは鉄道での移動を大いに称賛している (Grossman 339-41)。例えば、『家庭の言葉』の記事「飛行」(“A Flight”)では、鉄道と蒸気船を利用したロンドンーパリ間の短時間での移動を魔法のような経験と捉え、「この無味乾燥な時代に、アラビアンナイトを現実のものとした」(“realising the Arabian Nights in these prose days”)と絶賛する (533)。ここでは機械そのものが描かれているわけではないが、新しいテクノロジーにディケンズが心を躍らせ、『千夜一夜物語』の空想的な物語を呼び起こしている様子が窺える。

巨大な機械はしばしば「怪物」(“monster”)に喩えられるが、『ドンビー父子』における機関車もまた「怪物」と呼ばれる。息子の死後、ドンビー氏が激情を押し隠して移動するが、その時に乗っている列車は、何度も「無慈悲な怪物、死」(“the remorseless monster, Death”)に喩えられ (313-14)、そして恐怖に苛まれたカーカー (Carker) にとって、機関車は「怪物」、そして「悪鬼」(“the Devil”)となり、その破壊性が強調される (840)。その一方で、鉄道が敷設されたスタッグズ・ガーデン (Staggs's Garden) の描写では、蒸気機関車が「飼い馴らされたドラゴン」(“tame dragons”)に喩えられ、むしろ好意的に描かれている。

Night and day the conquering engines [ . . . ], advancing smoothly to their journey's end, and gliding like tame dragons into the allotted corners grooved

out to the inch for their reception, stood bubbling and trembling there, making the walls quake, as if they were dilating with the secret knowledge of great powers yet unsuspected in them, and strong purposes not yet achieved. (245)

この文章では、蒸気機関車が巨大な力を内に秘めている怪物であることを示しながら、「飼い馴らされた」という形容辞を加え、さらに空想上の心理状態を付与されることによって、その破壊性、暴力性が打ち消され、親しみやすいものへと変容していると言える。このように、『ドンビー父子』執筆の時点で、すでにディケンズの機械に対する両義的な態度が見て取れる。彼は機械の強大な力が持つ危険性を認識しながらも、機械に惹かれ、親しみを覚えていたのではないだろうか。

機関車は機械の中でも特殊な位置を占めており、コークタウンの工場機械と同列に扱うことはできないかもしれない。また、K・J・フィールディングとアン・スミス (K. J. Fielding and Anne Smith) は、ディケンズが特に『ハード・タイムズ』執筆時の辺りから産業化に対する不信を表明しはじめたことが、マーティノーとの不和の原因であるとしている (415)。『ドンビー』と『ハード・タイムズ』執筆の間に、ディケンズの機械に対する態度が変化したという可能性も考えられないことはない。しかし、『ハード・タイムズ』よりも後にディケンズ本人によって書かれた記事に、工場機械が空想力によって変容する描写が見られる。『非商用旅人』(*The Uncommercial Traveller*) の、「チャタム工廠」(“Chatham Dockyard”) では、造船機械は「忠順な怪物」(“obedient monster”, “dutiful monster”) と呼びかけられて、独自の生命を帯びはじめる。

“Obedient monster, please to bite this mass of iron through and through, at equal distances, where these regular chalk-mark are, all round.” Monster looks at its work, and lifting its ponderous head, replies, “I don’t particularly want to do it; but if it must be done—!” The solid metal wriggles out, hot from

the monster's crunching tooth, and it is done. "Dutiful monster, observe this other mass of iron. It is required to be pared away, according to this delicately lessening and arbitrary line, which please to look at." Monster (who has been in a reverie) brings down its blunt head, and, much in the manner of Doctor Johnson, closely looks along the line—very closely, being somewhat near-sighted. "I don't particularly want to do it; but if it must be done—!" (264–65)

ここでの怪物、すなわち機械は、その強大な力が示されているにもかかわらず、陽気な空想に彩られているために、恐怖の対象とはなっていない。このような機械の描き方には、スタッグズ・ガーデンの「飼い馴らされたドラゴン」と同じ精神が感じられる。つまり、産業化に関する自身の立場がどのようなものであれ、技術革新のもたらした機械に対して、ディケンズはずっと変わらず、畏怖の念と共に親しみを抱いていたように思われる。そして、コークタウンの「憂鬱な狂気のゾウ」にも同じ精神が流れているのではないだろうか。確かに『ハード・タイムズ』は産業化への批判を表明している作品であり、コークタウンの描写にも産業化のもたらした弊害を示そうとする意図が感じられるが、特に機械そのものに対しては両義的な視線が注がれている。そこには、「空想」を擁護する作品の価値観の実践という意味合いと同時に、ディケンズが機械そのものに抱いていた複雑な感情が込められている。機械の中にある潜在的な破壊性、その危険性を認めながらも、ディケンズの想像力はその圧倒的な存在に魅了され、刺激されて、どこか親近感のある怪物という機械のイメージを作り出しているのではないだろうか。

## 注

<sup>1</sup> ヴィクトリア朝文学研究、文化研究における反産業主義的傾向への批判、および同時代の産業化への再評価に関しては、例えばBizup 1-17、Sussman "Machine Dreams" 197-204、Ketabgian 1-14参照。

- <sup>2</sup> ただし、カーライルは「機械的なもの」を必ずしも否定的な意味で用いているわけではなく、「機械的なもの」と「動的なもの」の融合を目指すべきである、としている。Bizup 8-9参照。
- <sup>3</sup> ディケンズの描写において無生物が生命を帯びる現象が多くみられる点については、例えばVan Ghent 419-38 参照。
- <sup>4</sup> 『家庭の言葉』の時期のディケンズとマーティノーの不和に関しては、Fielding and Smith参照。
- <sup>5</sup> 『家庭の言葉』の記事が産業技術に対して示す複雑な反応については、Waters参照。
- <sup>6</sup> レイチェルの妹の死に関する文章と注の削除は、*Hard Times*, Norton Critical Edition, 253に収録されている。
- <sup>7</sup> 『ハード・タイムズ』における機械に近い人物の健全さについては、ジュリエット・ジョン (Juliet John) が指摘している (168-69)。

## 引用文献

- Bizup, Joseph. *Manufacturing Culture: Vindications of Early Victorian Industry*. Charlottesville: U of Virginia P, 2003.
- Collins, Philip. "Dickens and Industrialism." *Studies in English Literature, 1500-1900* (1980): 651-673.
- . "Queen Mab's Chariot among the Steam Engines: Dickens and 'Fancy'." *English Studies* 42 (1961): 78-90.
- Carlyle, Thomas. "Signs of the Times." *The Works of Thomas Carlyle*. Vol. 27. Ed. Henry Duff Trail. Cambridge: Cambridge UP, 2010. 56-82.
- Dickens, Charles. "A Preliminary Word." *Household Words* 30 March 1850. 1: 1-2.
- . "Chatham Dockyard." *The Uncommercial Traveller and Reprinted Pieces*. Oxford: Oxford UP, 1958. 260-68.
- . *Dombey and Son*. Ed. Andrew Sanders. London: Penguin, 2002.
- . "A Flight." *Household Words* 30 August 1851. 3: 529-33.
- . *Hard Times*. Norton Critical Edition. 3rd ed. Ed. Fred Kaplan and Sylvère Monod. New York: Norton, 2001.
- Fielding, K. J., and Anne Smith. "*Hard Times* and the Factory Controversy: Dickens vs. Harriet Martineau." *Nineteenth-Century Fiction* 24.4 (1970): 404-427.
- Gallagher, Catherine. *The Industrial Reformation of English Fiction: Social Discourse and*

- Narrative Form, 1832–1867*. Chicago: U of Chicago P, 1985.
- Grossman, Jonathan H. “Transport.” *Charles Dickens in Context*. Ed. Sally Ledger and Holly Furneaux. Cambridge: Cambridge UP, 2011. 334–342.
- John, Juliet. *Dickens and Mass Culture*. Oxford: Oxford UP, 2010.
- Joshi, Priti. “An Old Dog Enters the Fray; or, Reading *Hard Times* as an Industrial Novel.” *Dickens Studies Annual* 44 (2013): 221–241.
- Ketabgian, Tamara Siroone. *The Lives of Machines: The Industrial Imaginary in Victorian Literature and Culture*. Ann Arbor: U of Michigan P, 2011.
- Leavis, F. R. *The Great Tradition*. 1843. Repr. London: Penguin, 1993.
- Morley, Henry. “Ground in the Mill.” *Household Words* 22 April 1854. 9: 224–227.
- Sicher, Efraim. *Rereading the City / Rereading Dickens: Representation, the Novel, and Urban Realism*. Brooklyn, NY: AMS, 2003.
- Sussman, Herbert. “Machine Dreams: The Culture of Technology.” *Victorian Literature and Culture* 28 (2000): 197–204.
- . *Victorians and the Machine: The Literary Response to Technology*. Cambridge, Massachusetts: Harvard UP, 1968.
- Van Ghent, Dorothy. “The Dickens World: A View from Todgers’s.” *Sewanee Review* 58 (1950): 419–38.
- Waters, Catherine. “‘Fairy Palaces’ and ‘Wonderful Toys’: Machine Dreams in *Household Words*.” *Dickens Quarterly* 25.4 (2008): 215–231.